

森林が支えてくれる 私たちの生活 —SDGsと森林—

SDGsと森林 —連載開始に当たって

土屋 俊幸 Tsuchiya Toshiyuki 東京農工大学名誉教授

専攻は「林政学」。2019年から現在に至るまで、林政審議会の会長を務める。ほかに、(一財)林業経済研究所所長や、(公財)日本自然保護協会執行理事を兼任している

はじめに

これから6回にわたって「森林が支えてくれる私たちの生活—SDGsと森林—」というテーマで、連載をすることになりました。森林は世界の陸地の31%(2019年)を占めていますが、人間社会と森林との関係は、地域によって大きく異なるので、今回の連載では、主に日本国内の状況や問題、課題に絞ってお話することにしたいと思います。ちなみに、日本の森林率は67%です(2017年度)。しかし、森林は動かないので、土地利用としての森林や、森林がもたらす恩恵(生態系サービス)については、国内に限ってお話できるとしても、商品としての木材は世界中で流通していますし、気候変動の問題はまさにグローバルな問題ですので、適宜、そうした国の枠組みを超えた問題・課題についても触れていきたいと思います。

SDGsの考え方

さて、現在、国際的な共通の課題として、多くの国で取り組みが行われており、日本国内でもさまざまなところで見聞きするようになってきたのがSDGsです。「持続可能な開発目標」の略で、2015年に日本を含む国連加盟の国々が合意した「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載された約束事です。このSDGsが、例えば「気候変動に関する国際連合枠組条約」や「生物の多様性に関する条約」などの条約と根本的に異なるのは、各国による調印・批准の手続きを取っていないことでした。つまり、法的拘束力を持たせず、あくまでも約束事として、各

国、各国民の自主的努力、創意工夫で目標達成をめざそうとしているわけです。したがって、今回お話しするSDGsの考え方、目標に沿った森林に関する取り組みも、1つの正解があるわけではなく、行政、市民、NGO、地域などがそれぞれの持ち場で、それぞれが自ら考え、工夫した取り組みの総和として、ある成果が得られたということになります。であるからこそ、例えば、日本という単位であれば、中央政府が学識経験者を集めて計画を作り、その計画に基づいて取り組めば達成できるというような、いわばトップダウンのものではないのです。

実は、2021年6月に国の基本的な政策を示した「森林・林業基本計画」が変更(これは行政の用語で、一般的に言えば「改定」になります)になったのですが、今回、連載のお話をいただいたのは、その計画づくりに林政審議会の会長としてかかわったことが関係しています。この森林・林業基本計画のポイントを林野庁が説明した資料や、政府が毎年発行している「森林・林業白書」には、SDGsの17の目標(ゴール)のロゴが項目ごとに示されていて、森林・林業関係の国の政策がどうSDGsと関係しているかが示されています。このようにSDGsロゴ(図)が

図 SDGsロゴの一部(国際連合広報センター)



ゴール1



ゴール15

国、政府の文書に載るようになったこと自体は歓迎されるべきことなのですが、ただ前述したように、SDGsは本来ボトムアップで実施されるべきものであることを私たちはよく認識しておく必要があると思います。

もう一つ、気をつけなければならないのは、SDGsの各目標が「相互連関性」を持つことであり、したがって「統合的な解決」がめざされるべきであることです。例えば、ゴール15の「陸の豊かさを守ろう」として「持続可能な森林経営」が達成されていたとしても、仮にそれが地域住民の低賃金労働によって支えられていたとすると、それはゴール1のあらゆる場所のあらゆる形態の「貧困をなくそう」に抵触することになり、SDGsとしては適切な活動ではないこととなります。この「相互連関性」という考え方やとらえ方は、要するに、物事は、単独で起こるのではなく、さまざまな事柄の絡み合いの作用の中で起こるといって、私たちの日常の生活での常識と同じであり、すんなりと受け入れることができます。

しかし、考えてみれば、日本でいえば明治期以降の社会経済の工業化、資本主義化を支えてきたのは、絡み合った物事を分解整理し、いくつかの要素に分け、それぞれの要素について、比較的単純な法則性を見だし、その法則に基づいた合理的な方策を考え、物事を解決していくような、いわゆる近代的な物のとらえ方、考え方でした。そして、そのような近代的な社会、市場経済に基づく競争社会では、貧富などの社会的格差が生じざるを得ません。SDGsは「相互連関性」と「統合性」で、こうした社会のあり方に「変革」を起こし、「誰一人取り残されない（取り残さない）」社会を作っていこうという世界的な取り組みなわけで、それは並大抵のことではありません。

実は、自然科学の世界では、例えば、人間の身体→各器官→細胞→染色体→遺伝子というように、構成要素に分解して、より細分化された

単位を探究していく方向性が究極まで進んでいる一方で、生態学に代表されるような、構成要素のそれぞれの相互連関性を重視し、生態系としての全体、あるいは一体的な物としてとらえる有力な見方が存在してきました。森林で考えれば、一本、一本の樹木や森林に生息する多様な生物の各個体に分けてとらえるのではなく、非生物も含めた多くの要素の相互作用に基づく森林生態系としてその動態をとらえ、評価していくような物の見方があります。SDGsはそうした見方、考え方に近いのかもしれませんが。

SDGsに対する批判・SDGsウォッシュ

SDGsのことを「現実逃避」などと批判する声もありますが、SDGsは、現実の世界における今すぐの取り組みとして、十分依拠するに足りる政策パッケージであり、また背後には「社会の変革」を進めるための大変大胆な方向性が示されていると私は考えています。最近は、「変革する」という日本語訳は正しく本来の意味を伝えておらず、より根本的な変化を示すため、表面的な変化(チェンジ)ではなく、あえて「トランスフォーム」とする人が多いのもそのような考え方に基づいているのだと思います。

もう一つ、SDGsに対する内部からの批判として、「SDGsウォッシュ」といわれるものにも触れておく必要があるでしょう。SDGsウォッシュとは、実態以上にSDGsに取り組んでいるように見せかけることを指します。要するに「やったふり」はいけないということです。「ロゴだけ付けても変わらない」というストレートな言い方もあるように、SDGsの「相互連関性」を無視した単独項目での「タグ付け」はほとんど意味がありませんし、むしろ現実を糊塗する^{こて}という意味では有害かもしれません。

これからの連載の中身

さて、ずいぶん横道にそれてしまいましたが、

SDGsに対する私の考え方をお話しすることができました。初回の義務として、これから5回の中に、何をお話しするかについて、少なくとも現時点での予定をお知らせしておくことが必要だと思います。

まず全体の方針ですが、前記のSDGsの視点から、森林、いわゆる林業、そして木材について、現在の状況、問題・課題をなるべく分かりやすく説明させていただくことに尽きます。そこで、2つ、執筆方針をお約束として書かせていただきます。その1つは、毎回、1つもしくは2つのモノやコトガラを取り上げて、それを中心にして、その回のテーマを説明することです。もちろん、そうすると、そのモノ・コトガラに関することは比較的詳しく説明することができますが、多くのことを網羅的に伝えることはできなくなります。しかし、これはいわば二律背反ですから、ご勘弁をお願いいたします。もう1つの方針は、歴史的な流れや変化を重視することです。森林の持つ長期性、つまり無立木地*から森林として成立するまでに、早くても十数年、日本のスギ・ヒノキの人工林であれば50、60年、いわゆる天然林では数百年かかるという時間の長さを考えたとき、森林から私たちが受け取るさまざまな恩恵(生態系サービス)やマイナスの影響についても、比較的長い時系列のスパンでみていく必要があります。逆の言い方をすれば、現状だけをみて評価、判断することの危うさを十分意識したいということです。

これらの方針を踏まえて、次回以降の内容としては、次のようなことを考えています。第2回では、日本における森林の量と質の大きな変化を、有史以来、特に江戸時代以降の歴史のなかで詳しく考えます。私たちの生活と森林との関係は、森林を資源としてどのように利用し、また森林環境からどのようなプラス・マイナス

の影響を受けてきたかによっていますが、それらは森林が変化することによっても大きく変化してきたからです。この回に中心にお話しするモノ・コトガラとしては、スギそれから草地を取り上げます。

第3回は、森林から私たちが受ける恩恵の中で最も重要な木材の利用についてです。実は、木材は、世界中を移動する国際商品なので、特に第二次世界大戦以降についての話は、日本の国外にも広がらざるを得ません。また、木材は、丸太を加工した製材品などの構造材としてだけでなく、紙に代表されるように、工業製品の原材料としても利用されており、さらに、このようなマテリアル利用のほかに、エネルギー利用も大きな比重を持っています。この回のモノ・コトガラとしては、合板とエネルギーを取り上げます。

第4回は、森林が、森林として存在していることによる機能、恩恵(生態系サービス)についてです。代表的な機能は、国土保全、水源かん養、自然保護、生活環境維持などですが、近年は気候変動対策としての炭素固定機能も大きく注目されているのは周知のとおりです。この回のモノ・コトガラとしては、水と炭素を取り上げる予定です。

第5回は、森林資源利用の中で、経済学でいうサービス、つまり目に見えない生産物(商品)としてのサービスの生産である観光レクリエーション、教育などです。モノ・コトガラとしては、森林における観光レクリエーションの1つ、登山を取り上げる予定です。

そして、第6回では、最終回として、もう一度、森林とSDGsの関係についてまとめて考えます。モノ・コトガラとしては、NbS(Nature-based Solutions、自然に根ざした解決策)を取り上げる予定です。

* 伐採跡地。伐採後、再植林していない土地、再植林の予定のある土地。本来は森林であるべき土地だが、木が生えていない土地のこと